

# 歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

◎平成二十三年五月二十一日(第七回)

(佐藤 紀之)

バス揺れる数の多さに震災の傷跡を知る東北の道  
夢の国一目散に駆ける群れ路面の凸凹 足は取られず  
被災の子 修学旅行に連れて行く山形のバスに誇りを感じず  
祈りつつ 出発迎え 祈りつつ 旅を過ごして 目に入る笑顔

(佐藤 亮照)

胃カメラの精密検査終りにてあらためて知る 空の青さよ  
突然の場にまみえし 恩師かな 五十二年の年月数える  
はるばると 遠き街より訪れし もと部下の姿 ありがたきこと

(松田 昌泰)

「あしかがフラワーパークにて詠みし二首」

「白藤」の目も鼻も奪う 見事さに溜息のみで会話続かず  
特大の花火のように 咲き誇る 「大藤」もまた 香りさわやか

(黒沼 貞志)

旅立ちの前にて交わす 言の葉で 浮かぶは娘の 歩みし年月  
宴の後 残る余韻の 一週間家に漂う 感謝の花の香

立夏過ぎ ござの日差しを 思い出し 求めし 流行の グリーンカーテン  
はやり

参道の濡れる石段 鏡にし 人の気配を 残す紫陽花

「山歩きで詠みし四首」

新緑の 芽吹く木立に 凜と立ち 眩しさ際立つ 白きこぶしよ

大山の 桜と佇む 石鳥居 同じ 緋色は 無言の語り部

龍の山 歩みに連れ添う 沢の音 一息つくたび 歴史の舞台

新緑の いつもの山道 水平環 木々の合間に パノラマショー

(中村 昌平)

揺れるたび 思い出すは 闇の中 ふと手を見れば 汗ばむ携帯